

大学院修了にあたり

大学院修了にあたり、感謝を込めて

生体歯科補綴学分野 4年 小出 耀

新潟大学大学院での4年間で歯科医師としての礎ができました。これこそ私にとって生涯の宝だと感じています。携わらせていただいた臨床、教育、研究を通して私が具体的に学ばせていただいたことを述べさせていただきます。

「臨床」

毎週行われる医局の症例検討会では、咬合崩壊した患者の治療方針や治療計画などを、若手から上級医まで多くの先生方と議論させていただくことができました。これにより、現状把握のための病態診断、予知性の高い治療目標の設定、そして再発防止のためのメンテナンスに至るまで、正確な検査・診断能力が不可欠であることを痛感しました。特に、一口腔単位で治療計画を的確に立案することが、歯科医師にとって非常に重要であると日々教えていただきました。

魚島教授の診療見学では、補綴治療が患者のQOL向上に大きく貢献し、笑顔を取り戻す姿を数多く目の当たりにし、深く感銘を受けました。歯科医師の果たす役割の大きさや可能性を学ばせていただき、患者にとって最善の治療を提供できる歯科医師になりたいという思いが湧いてきました。

「教育」

当分野が担当する学生実習は、歯冠崩壊や少数歯欠損など、様々な問題を抱えた症例を想定した顎模型を提示し、学生に治療計画の立案から実際の治療までの過程を自分で考えながら構築するものでした。学生が歯科医師としての基礎的な知識と技術を確実に習得し、将来の臨床で活かせるように効率良く組み立てられていて、一人一人が着実に成長していく姿は、指導する立場として心から喜び

を感じるものでした。私自身も学ぶことが多く、素晴らしい実習に参加させていただいたことに感謝しております。

「研究」

私の研究テーマは、「異なるジョイント様式におけるアバットメントの繰り返し締結がスクリュー形態および除去トルクに及ぼす影響」でした。インプラント治療において、アバットメントスクリューの緩みや破損は、治療の成功率を大きく左右する重要な問題です。本研究では、様々なジョイント様式のインプラントを用いて、繰り返し締結がスクリューの形態や除去トルクに与える影響を分析し、明らかにすることができました。

2023年に開催された日本口腔インプラント学会学術大会で発表し、優秀ポスター発表賞を受賞することができました。この受賞は、ひとえにご指導いただいた魚島教授、長澤先生をはじめとする当分野の先生方、そして実験に協力してくれた友人Kooanantkul Chuta先生のお陰であると、心から感謝致しております。

最後になりますが、この4年間、情熱を持ってご指導いただいた魚島教授をはじめ当分野の先生方、お世話になったスタッフの方々に厚くお礼申し上げます。今後も歯科医師人生をより輝かせて行けるように、日々邁進して行く所存です。

皆様方の益々のご活躍を、心よりお祈り致します。有難うございました。



日本口腔インプラント学会学術大会にて受賞

大学院修了にあたり

顎顔面口腔外科学分野 相澤有香

私は、学生の頃から口腔外科学分野に興味と憧れがありました。専門性をもち、基礎研究を通して科学的思考を養いたいとの理由から、新潟大学卒業後の大学院進学を漠然と決めていたものの、卒業研修の1年間は県外で挑戦し一般歯科診療を広く学べる最後の機会と感じ、東京医科歯科大学での総合診療研修を選びました。コロナ禍の最中ではありましたが、毎日が刺激的で新たな学びにあふれており、充実した日々を過ごしました。

大学院に入学し、1年目は外来、病棟と歯科麻酔科での実臨床を通し研鑽を積みました。憧れて入学したとはいえ、口腔外科というこれまでと全く異なる環境での日々は時に苦しくもありましたが、先生方に親身にご指導いただき、新たな知識や手技が増えていく実感と、少しずつですが治療に貢献できるようになっているという喜びを原動力に励むことができたように思います。また、口腔外科学会等での学会発表や論文投稿を経験し、知見を広げる楽しさを感じることができました。

そして、生体組織再生工学分野にご縁をいただき、2年次から基礎研究を開始しました。正常口腔粘膜・口腔癌病態共存モデルの開発、足場の硬さをパラメーターとした口腔粘膜上皮細胞シートの特性解析、という2つの大きなテーマを軸に、口腔粘膜のティッシュエンジニアリングや再生医療に関する研究に携わらせていただきました。細胞中心の生活は楽しく、時間を忘れて研究することができました。自分の無力さや未熟さをもどかしく、時に不安に思いながらも、毎日継続する中で稀に小さな成長や成功を感じ、新たな発見を通して理解が深まる瞬間があり、改めて研究のおもしろさや奥深さに惹かれ意欲がわいてくることの繰り返しだったように思います。知識を深め、研究が進むにつれて世界がひろがっていくということが、新鮮な驚きでした。Kenji先生をはじめ様々な専門分野の先生方に熱心にご指導いただきました。国際学会や論文の発表、国際特許の出願など、たくさんの得難い経験をさせていただいた

ことも印象に残っています。

在学中には、口腔外科や現在の研究テーマを超えて大学院講義を受講する貴重な機会をいただき、歯科学の幅広い学習を積極的に深めることができました。また、様々な地域の病院歯科、開業歯科医院の先生方にも出張でお世話になり、多くを学ばせていただきました。

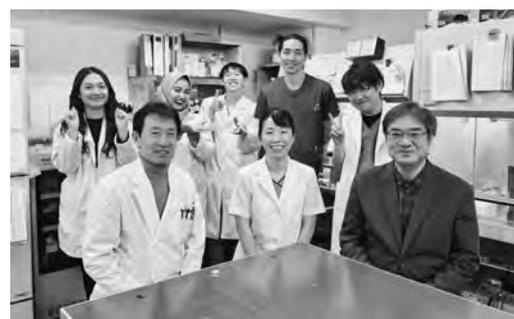
私にとってこの4年間は、どのような歯科医師でありたいかを考える期間ともなりましたが、振り返れば当初は「これでいいのか」という迷いや悩みの中にありました。折に触れて多くの先生方にお話をうかがい、今の自分ができること、目指したい姿を再確認して、選んだ道を正解にするよう歩いてきたように思います。不思議なもので、悩みぬくと心機一転、表情の変化を指摘されるほど新たな気持ちで向き合うことができました。3年次で次世代プロジェクトに出願、採用されたことも転機となりました。

今後、臨床、研究を通して社会に貢献できるよう、さらに精進していく所存です。

最後になりましたが、富原圭教授、泉健次教授をはじめ、ご指導いただきました先生方に、心より御礼申し上げます。そして、同期や後輩、家族にも感謝しております。ありがとうございました。



タイで顎顔面口腔外科学分野の先生方と（著者右から2番目）



生体組織再生工学分野の先生方と（著者中央）

大学院修了にあたり

口腔生命福祉学専攻博士前期課程
桜井花菜

口腔生命福祉学専攻博士前期課程2年の桜井花菜と申します。この度、歯学部ニュースの寄稿依頼をいただきましたので「大学院修了にあたり」というテーマで執筆させていただきます。

大学院に進学することを視野に入れたのは、学部生4年の秋頃でした。それまでは進学することなんて全く考えていませんでしたが、卒業が近づくにつれ「もう少し専門的な分野を学んでみたい」と思うようになったのがきっかけだと思います。

私は、2023年4月に新潟大学医歯学総合病院に就職し、歯科衛生士として働きながら社会人大学院生として博士前期課程に進学させていただきました。社会人と大学院の両立は、時間がうまく取れないという点で、とても大変な思いをすることが多かったです。しかし、幸い職場の目の前が歯学部であり、職場の同期が同じ大学院に通っていたので、同期と協力して励まし合いながら、勤務後に大学院に行き、少しずつですが研究を進めてきました。

私は「高齢者の歯数および咬合支持数と身体機能低下の関連」をテーマとして、研究に取り組みました。大学院生になり初めて自分で取り組む研究であり、研究の進め方や解析方法など、最初は何もわからず戸惑うことばかりでしたが、担当の先生方は初歩から優しく指導してくださいました。

実際に研究をしてみると、論文に取り掛かるまでが想像以上に大変だったことがわかりました。データの分類から、解析、参考文献探しと初心者の私にとっては時間のかかるものばかりでした。

途中、結果が出なかったり方向性を見失ったりと研究に行き詰まり、辛いと感じることもありましたが、先生方のご指導や同期の励ましのおかげで最後まで尽力することができました。

2年間は思っていたよりもあっという間に終わってしまいました。社会人ということもあり、時間のない中での研究でしたが、その中で人生初の学会発表も経験させていただきとても有難く思います。この大学院生活は振り返ってみると大変な思い出の方が多かったと感じますが、このたくさんさんの経験のおかげで自分としては大きく成長できたと感じています。

最後に、研究を進めるにあたり、ご指導をいただいた先生方に改めて御礼を申し上げます。大学院での経験を活かして、これからも精進していきたいと思えます。



2024年新潟開催の
日本歯科衛生学会第19回学術大会にて（筆者：右）